

【学会情報】

## シャトー・メルシャン 梔子ワイナリーについて

### Château Mercian MARIKO Winery

小林 弘憲

Hironori KOBAYASHI

メルシャン株式会社シャトー・メルシャン 梔子ワイナリー 〒386-0407 長野県上田市長瀬1425-1

#### 1. はじめに

シャトー・メルシャン 梔子 (まりこ)\*ワイナリーは、2019年9月に長野県上田市に誕生した。メルシャンとしては、勝沼ワイナリー (甲州市)、桔梗ヶ原ワイナリー (塩尻市) に続く3つ目の日本ワイン造りの拠点となる。梔子ワイナリーは、上田市にとって初めてのワイナリーとなるが、ワイナリーの建設に先立ち上田市 (旧丸子町) とメルシャンとの関係は20年ほど前に遡る。2000年当時、メルシャンでは国産ワイン事業の1つとして日本ワインの更なる高品質化を目指し、「まずブドウありき」、「良いワインは、良いブドウから」を合言葉に、ワイン用ブドウの栽培条件に優れたブドウ畑の探索を行っていた。一方、旧丸子町では、かつては広大な桑畑が広がっていた「陣場台地」と呼ばれる農地の多くに遊休荒廃 (耕作放棄) が目立つようになり、その活用方法 (新しい担い手) を模索していた。このようなことから、陣場台地における梔子ヴィンヤードの開園は、まさに「出会うべくして出会った」結果であると考えられる。

\*…6世紀半ばに在位していた欽明天皇の皇子である「梔子の皇子 (まりこのみこ)」が、この周辺を治めていたとする旧丸子町の歴史に基づいて「梔子」と命名し、ブドウ畑は梔子ヴィンヤード、ワイナリーは梔子ワイナリーとしている。

#### 2. 梔子ヴィンヤードとその個性 (テロワール)

長野県東部に位置する標高650 mの陣場台地は、非常に強い粘土質土壌で構成され、年間を通じて日照時間が長く、雨が少ない (年間降雨量は、1,000ミリに満たない)。あわせて、台地というその地形から風がよく吹き抜ける。この風は、ブドウの房周りを乾燥させ、病気になりにくい環境を作り出すとともにブドウの房を揺らす (ブドウの実と実が触れる) ことで一種の環境ストレスとしても働く。長い日照時間、朝・夕の日較差、少ない降雨量、強粘土質土壌、吹き抜ける風、これらの様々な栽培環境が梔子ヴィンヤードのテロワールとしてブドウ果実に表現され、その個性を生み出すと考えられる。特に収穫時における梔子ヴィンヤードのブドウは、糖度・酸度の良好なバランス、フェノール成分の成熟はもとより、メルシャンの有する他のブドウ産地と比較してブドウ果粒1粒1粒の大きさが1回りほど小さく、果皮の色も濃い凝縮したブドウになることが多い。2003年の開園以来、数回の造成工事を経て、2022年現在では、東京ドーム約6個分 (約29ヘクタール) の広さまで拡張した (一部、これから植栽を進める区画を含む)。現在は、シャルドネ、ソーヴィニオン・ブラン、メルロー、カベルネ・ソーヴィニオン、カベルネ・フラン、プティ・ヴェルド、シラー、ピノ・ノワールの8品種を栽培している。

### 3. 梔子ワイナリーの3つのテーマ

シャトー・メルシャン梔子ワイナリー（図1）は、梔子ヴィンヤード内の小高い丘に位置し、360°ブドウ畑に囲まれている（図2）。梔子ワイナリーは、その立地条件からもブドウ栽培からワイン醸造まで全てを見ることが出来る“魅せるワイナリー”をそのコンセプトとし、ワイナリー内部に多くのガラスを用いることで、ブドウ畑、仕込み場（レセプション）、醸造エリアおよび樽貯蔵庫（バレルセラー）を様々な角度から眺めることが出来る。また、ワイナリーの2階は、ワインの販売、テイastingおよびワイナリーツアーなどを行うセラードア機能を有している（図3）。

梔子ワイナリーは、3つのテーマを掲げている。1つ目は、「地域との共生」。地元（上田市）の皆様には、2003年の梔子ヴィンヤード開園当時から植樹、

除葉、収穫など年間を通じた栽培作業に多大なご支援をいただくとともに、ワイナリー建設に対する熱い思いもいただいていた。ヴィンヤードの開園からワイナリー完成までおおよそ16年を要したが、梔子ワイナリーが地域のコミュニティの場の一つとして気軽に訪れていただける存在となれるよう努めていきたい。最近では、地域の皆様への感謝の一環として、年に3回程度（春・夏・秋）の梔子マルシェを開催している（図4）。地元を中心とした店舗によるキッチンカーおよびテントなどの形式で出店いただき、周辺地域の食材と梔子のワインを楽しむ機会を創出させていただいている。今まで以上に梔子ワイナリーを観光ツーリズムの一部として選んでいただけるよう“魅せるワイナリー”に磨きをかけ、地域経済の活性化に寄与したい。

2つ目が「自然との共生」。2000年当時、一部遊休



図1



図2



図3



図4

荒廃地化していた陣場台地が椀子ヴィンヤードとしてブドウ畑に生まれ変わったことにより、年間を通じた栽培管理が行われるようになった。国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構（農研機構）が毎年行っている生態系調査によると、年を経るごとに多種類の植物・昆虫・鳥類の存在が確認され<sup>1,2)</sup>、在来植物の保護および生態系の維持に繋がっているとの報告をいただいている。最近では、絶滅危惧種に指定されている植物の発見もあり、自然との共生をテーマに今後もこの景観を守るべく日々の栽培管理、ひいては日本の里山を守る活動に励みたい。

さらに、この地域の未来を見据え子供たちの学習の場としての活用が、3つ目の「未来との共生」である。現在、地域の皆様と協働し、地元の小学生に向けた食育活動（じゃがいもの栽培）をヴィンヤードの一部で実施している。また、中学生および高校生に向けては、ブドウ栽培作業を通じた職場体験および社会科総合学習を行っている。さらには、より充実したワインツーリズムの検討を上田市の大学と開始している。今後もブドウ畑およびワイナリーすべてを活用し、ワインを楽しむことができる次世代を育てる取り組みをより強化していきたい。

#### 4. 椀子ワイナリーの特徴および対外的な評価

先にも述べたが、椀子ワイナリーは、ヴィンヤード内の最も高い場所に設置する。ブドウのレセプションは、その小高い丘の地形を活かし、各タンクの設置箇所と比較して3mほど高い（図5）。これは、ブドウ収穫後、除梗・破碎の工程を経たブドウ果粒にストレスを与えることなく発酵タンクまで移動する重力を用いたワイン造り（グラビティーフローシステム）の導入を椀子ワイナリーでも目指したことによる。また、循環型農業への取り組みとして、ワイナリー内に雨水貯留槽を設置し、ワイナリーに降った雨水を農業用水の一部として活用している。あわせて、ブドウ畑とワイナリーとの距離が近くなったことは、ナイトハーベスト等、より細やかなブドウ

収穫期の決定および今まで以上に細かい区画ごとの仕込み分けを可能とした（図6）。2019年から本格稼働した椀子ワイナリーを介して、今まで以上に椀子ヴィンヤードの魅力を皆様にお伝えできるものと期待している。

2022年に開催された「Japan wine competition（日本ワインコンクール）2022」において、椀子ワイナリーで初めて醸造を行った「シャトー・メルシャン 椀子シラー2019」が金賞をいただいた。2020年、2021年には、2年連続でワールドベストヴィンヤードTOP50\*\*（2020年30位、2021年33位）にも唯一



図5



図6

\*\*…「インターナショナル・ワイン・チャレンジ」（IWC）を主催するウィリアム・リード社が2019年に始めたコンペティション。世界を18地域に分けて世界中のマスターオブワイン、ソムリエ、ツーリズム等の専門家が指名され、計500人以上が優れたワインツーリズムを実現しているワイナリーを投票・選出する。ベスト50に選ばれるワイナリーは、世界が誇るワイン観光地であり、かつワインがもつ多様性も表現しているとされる。



図7

日本のワイナリーとして選出いただいた（図7）。これからもブドウおよびワインの品質と向き合い，国内外から更なる評価が得られるよう努めたい。

## 5. 今後の展望

長野県では，ワイン用ブドウの栽培が盛んな地域をその立地と気象条件の違いに合わせて4つの地区（桔梗ヶ原，日本アルプス，天竜川，千曲川）に分類し，「信州ワインバレー構想」を策定している。中でも椀子ワイナリーが属する千曲川ワインバレーは，山梨県をはじめとする日本の有名なワイン産地および長野県内における桔梗ヶ原地区などと比較すると，その歴史は浅いが，近年，続々と新しいワイナリーが開設されている。今後，今まで以上に他のワイナリーおよび行政の皆様と協働し，千曲川周辺におけるワインツーリズム形成の一助となれるよう努力したい。また，椀子ワイナリーの誕生によりシャトー・メルシャンにおいては，「3ワイナリー体制」が出来上がった。ここからが本格的なスタートとなるが，勝沼ワイナリー，桔梗ヶ原ワイナリー同様，椀子ワイナリーもシャトー・メルシャンのフィロソフィーを継承しつつ，さらには，ブドウ畑とワイナリーが一体となった事を活かした新たな取り組みにも挑戦し，シャトー・メルシャンはもとより，日本ワイン業界全体を大いに盛り上げていきたい。

## 参考文献

- 1) Katayama N, Uchida H, Kusumoto Y, Iida T. 2022. Bird use of orchards and vineyards in Japan: mitigating a knowledge gap with a systematic review of published and grey literature. *Ornithological Science*. 21(1). 93–114
- 2) 馬場友希. 2021. タソガレトビグモの日本四例目の記録. *ニッチェライフ*9. 91–92